

# 漢訳仏典における翻訳語「頗梨」の成立

宮 嶋 純 子

## The Establishment of “Po li” as Translated Words in Chinese Buddhist Literature

MIYAJIMA Junko

The word for the English “glass” in present day Chinese is “bo li” (玻璃). However, it is not well known that “bo li” is also a word that was used in translations of original Buddhist scriptures, but there, rather than “glass” it had the meaning of “crystal”. Along with pursuing the circumstances behind the establishment of “bo li” as a term used in the translation of Buddhist scriptures – it was written down in olden times as “po li” (頗梨) – in this paper I also considered the process of this word becoming generally and widely accepted in China and influencing the transformation of its meaning. In regard to the effect that the translation of Buddhist scriptures into Chinese has had on the formation of a Chinese vocabulary, research is conventionally focused on issues related to Buddhist doctrine and thought. However, in this paper, by paying attention to the original term “po li”, which has no direct relation to Buddhist thought, I wanted to find a new meaning to vocabulary research using Chinese translations of Buddhist scriptures.

キーワード：漢訳仏典，ガラスの名称，頗梨，玻璃，琉璃

### はじめに

古代中国は東アジア世界の文化形成において、主として周辺地域への文化の発信者という役割を担ったのであるが、もちろん中国それ自身の文化形成の過程にあつては、異なる文化の受信者という立場にもあつた。インド・西域よりの仏教の流入はその象徴ともいえる現象であり、やがて受容された仏教を自らのものとして中国仏教を成立させ、東アジア他地域の仏教文化の形成に主体的な影響を及ぼしたのである。その中心的存在となつたのが、中国語に翻訳された仏教経典、すなわち漢訳仏典であつた。

従来、漢訳仏典が中国語の語彙の形成に与えた影響については、仏教の教義思想に関するものを中心に研究がなされてきた。しかし考察の対象とすべきはそればかりではなく、直接的に仏教思想とはかわりを持たなくても、仏典から一般に受容され普及した言葉は数多い。本稿で取り上げる「頗梨」もそうした語彙のひとつである。

現代中国語におけるガラスの呼称は「玻璃」である。また別に「琉璃」の称もあり、こちらは一般に

ガラスの古名とされている。玻璃という名称は古くから行われたものであったが、漢字の表記は一様でなく、玻璃や玻黎等様々な字が充てられていた<sup>1)</sup>。そしてこの語の最古形は「頗梨」, 仏教経典を漢訳する際に使用された語であった。

「頗梨」とは元来、原語である梵語 *sphaṭika* (俗語形 *phalīa*)、水晶の意の音写語であった。初期の漢訳仏典においては *sphaṭika* の翻訳には中国固有の語彙である「水精」が充てられており、いわゆる意識がなされていたのだが、後に「頗梨」をはじめとする音訳語を使用するようになったのである。西域伝来の仏典の中で語られる透明で硬い鉱石のイメージと、西方産のガラスがどのように結びついたものか、「頗梨」は「玻璃」と字を変えて現代まで中国において受け継がれてきた。

しかし、この語の出自や意味の転化の経過についてはこれまであまり注目されず、不明瞭な点が多い。そこで本稿では、ガラスの呼称である「玻璃」の元となった「頗梨」という語の成立事情と本来の意義について、漢訳仏典での用例を中心に考察を加え、その後の中国社会への受容とガラスの意味への転用を考える上での基礎としたい。またガラスの古名としての「琉璃」についても、仏教典籍中の記述と仏教外の史料における用例を併せて観察する。

## 一 漢訳仏典における「頗梨」

はじめに述べたように、現代中国語でガラスの呼称として用いられる玻璃の言葉は、元来仏教経典を漢訳する際に使用された訳語「頗梨」から展開したものと考えられる。しかし、広義には仏教用語に分類されるこの頗梨という語は、仏典上ではガラスを指し示すものではなかった。本章では、種々の漢訳仏典に散見される頗梨の用例およびその定義、訳語としての出現時期等に注目し、仏教における「頗梨」がどのような来歴をもつ語であったのかを考察する<sup>2)</sup>。

### 1 「頗梨」の用例

漢訳仏典において、頗梨は常に宝石の一種として扱われてきた。ここでは実際の経文に「頗梨」がどのような形で現れているか、その用例を確認する。

仏教経典における宝石は、ある種の場面の描写を行うのに欠かせない、重要な役割を果たしている。それは西方極楽浄土や須弥山に代表される仏国土そのものを形作る材料であり、また仏国土に華やかな装飾を加えるものでもある。現世の王や富者の持ち物、すなわち権力や財力を象徴する描写としても用いられ、時には比喩の表現ともなる。

例えば後秦の鳩摩羅什訳『仏説阿弥陀経』には、極楽国土について次のように記述している。

又た、舍利仏よ、極楽国土に七宝の池有り、八功德水其の中に充滿す。池底は金沙の布地を以って

1) 例えば、『旧唐書』巻五、高宗本紀下には上元二(675)年正月の条に「支汗郡王、献碧玻璃」とあるが、同書巻一九八、弘祿国条には「貞観十七年、弘祿国王波多力、遣使献赤玻璃・緑金精等物」とするなど。

2) 後述のように、梵語 *sphaṭika* (パーリ語 *phalīkā*) を音訳したものが「頗梨」であるが、この音訳語はあくまで代表的なものであって他に「頗黎」「玻黎」「頗致迦」等の様々な表記がなされた。本稿では *sphaṭika*・*phalīkā* の音訳語を一括して「頗梨」と表記する。

純（つつ）む。四辺の階道は、金・銀・琉璃・頗梨合成す。上に樓閣有り、亦た金・銀・琉璃・頗梨・車渠・赤珠・馬瑙を以て、巖かに之を飾る<sup>3)</sup>。

極楽国土には七宝の池があり、その四方の階道は金・銀・琉璃・頗梨で造られている。またその上方の樓閣は金・銀・琉璃・頗梨・車渠・赤珠・馬瑙といった各種の宝石で装飾されるという。

同じく鳩摩羅什による漢訳『妙法蓮華経』巻四、信解品には、さる富豪の持つ財宝として倉に溢れる幾つかの宝石、金・銀・琉璃・珊瑚・虎珀・頗梨珠の名をあげている。

其の父は先来、子を求むるも得ず、一城に中止す。其の家は大いに富み、財宝は無量なり。金・銀・琉璃・珊瑚・虎珀・頗梨珠等は、其の諸の倉庫に悉く皆、盈溢す。多くの僮僕・臣佐・吏民有りて、象・馬・車乘・牛・羊は無数なり<sup>4)</sup>。

上述の二例は、いずれも種々の宝石名が列挙されている。これが仏教経典における宝石の典型的な登場の仕方であり、幾つもの宝石名を連ねた中に頗梨及び頗梨珠の語を見出すことができる。他にも金・銀・琉璃といった名称は『仏説阿弥陀経』『妙法蓮華経』とも共通しており、全く無秩序に宝石が並べられているのではない。

仏教経典ではこのように、金や銀をはじめとする宝石類は大抵の場合単独では用いられず、その用例において現れる種類や形式は一定のパターンを持っていた。すなわちこれらの宝石群は、四つ或いは七つをまとめた形で経文中に現れる。「四宝」「七宝」と総称されるのがそれである。

諸の比丘よ。須弥山王は、大海中に在り。下は狭く上は闊く、漸漸にして寛大なり。端は直なりて曲らず。大身牢固として佳妙なること殊特なり。最勝にして観る可し。四宝合成す、所謂金・銀・琉璃・頗梨なり<sup>5)</sup>。

諸の比丘よ。須弥山王は、上分れて峰有り。四面挺出し、曲りて海上に臨む。各おの高さ七百由旬なり。殊妙にして愛づ可し。七宝合成す、所謂金・銀・琉璃・頗梨・真珠・車渠・瑪瑙の莊校する所なり<sup>6)</sup>。

上掲の二条は隋の闍那崛多等訳『起世経』巻一、閻浮洲品からの引用である。『起世経』は、経名が示すように、仏教的世界観や宇宙論が述べられた経典であり、巻一で仏教的宇宙の中心と考えられている須弥山（Sumeru）の概観を説いた箇所からの抜粋である。この経文によれば、大海中であって大身牢固たる須弥山王は「四宝」すなわち「金・銀・琉璃・頗梨」より成り、須弥山王の上方、七百由旬に達する四方の峰は「七宝」すなわち「金・銀・琉璃・頗梨・真珠・車渠・瑪瑙」より成るといふ。

ここでの「四宝」つまり金・銀・琉璃・頗梨の組み合わせは、先にあげた『仏説阿弥陀経』における

3) 『大正新修大蔵経』（以下、『大正蔵』と略す）巻12, 347頁上「又舍利仏。極楽国土有七宝池、八功德水充滿其中。池底純以金沙布地。四辺階道、金銀琉璃頗梨合成。上有樓閣、亦以金銀琉璃頗梨車渠赤珠馬瑙而巖飾之」。

4) 『大正蔵』巻9, 16頁中「其父先来求子不得。中止一城。其家大富財宝無量。金銀琉璃珊瑚虎珀頗梨珠等。其諸倉庫悉皆盈溢。多有僮僕臣佐吏民。象馬車乘牛羊無数」。

5) 『大正蔵』巻1, 310頁下「諸比丘。須弥山王、在大海中。下狭上闊、漸漸寛大。端直不曲。大身牢固。佳妙殊特、最勝可觀。四宝合成、所謂金銀琉璃頗梨」。

6) 『大正蔵』巻1, 310頁下「諸比丘。須弥山王、上分有峰。四面挺出、曲臨海上。各高七百由旬、殊妙可愛。七宝合成、所謂金銀琉璃頗梨真珠車渠瑪瑙之所莊校」。

四辺の階道を構成する四種の宝石、金・銀・琉璃・頗梨と全く同内容である。『仏説阿弥陀経』では特に明記していないものの、やはり「四宝」を意識しての記述であろうと考えられる。また「七宝」は先の「四宝」に真珠・車渠・瑪瑙を足して七種を揃えたもの、『仏説阿弥陀経』言うところの楼閣の装飾に用いられる金・銀・琉璃・頗梨・車渠・赤珠・馬瑙も同様に前半部分の四種は変わらず「車渠・赤珠・馬瑙」が加えられて七種が数えられており、これも「七宝」を念頭に置いて描かれたものと思われる。七種の内訳自体も真珠と赤珠など多少の相違があるものの、だいたい似通っていると言っていいたろう。なお『妙法蓮華経』の例において富豪の宝としてあげられた金・銀・琉璃・珊瑚・虎珀・頗梨珠は種類が六つと少なくイレギュラーなようではあるが、基本的ともいえる金・銀・琉璃・頗梨の「四宝」<sup>7)</sup>はしっかりとこの中に含まれていることに注目したい。

以上のように、仏典中に現れる頗梨の用例について、若干ではあるが例をあげて見てきた。仏教経典における宝石は、単独ではなく数種類のを並べた記述が多くあり、頗梨もその内のひとつに加わっている。とりわけ頗梨は金・銀・琉璃と共に「四宝」に数えられ、宝石群の中でも特に重要度が高いとされていた<sup>8)</sup>と考えられる。

しかし、ここからは金や銀と並び称される「頗梨」が実際にはどのような宝石を指したものかは不明である。そこで次節では、仏教経典における頗梨の定義について考察する。

## 2 「頗梨」の定義

頗梨を含めた七宝のそれぞれについて、今日のどの宝石に該当するかを論じた定方晟氏によれば<sup>9)</sup>、頗梨は梵語 *sphaṭika* (パーリ語 *phalika*) の音訳語であり、意識されて水精となる。水精は「水の精」の意であり、無色透明の水晶をさしたことは間違いなだらう、とされており<sup>10)</sup>、一般にも *sphaṭika* は水晶のことであるとされている。意識語である水精については次節で触れるのでひとまず置いておき、ここでは頗梨が水晶を表す *sphaṭika* の音訳語であることを踏まえながら、仏典において「頗梨」がどのよ

7) 本文中で述べたように、仏典における宝石類の括り方には「四宝」と「七宝」がある。七宝は四宝にあと三種類を加えたものであることから、四宝の方がよりメインであり七宝は後から発展成立したものと考えられる。「七宝」は本来、古代インドにおける理想的君主である転輪聖王の持つ「七つの宝物」を意味する言葉でその内訳は「輪宝・象宝・馬宝・珠寶・玉女宝・典藏宝・典兵宝」であるという(東晋僧伽提婆訳『増一阿含経』巻一、『大正蔵』巻2、552頁上)。一方には「四宝」という宝石の括りがあり、他方「転輪聖王の七宝」という概念があって相互に影響しあい、宝石としての「七宝」が成立したのであろう。

8) 『起世経』巻一には、須弥山の北面は金・東面は銀・西面は頗梨・南面は琉璃でできているとの記述もあり、この四種の宝石が重要視されていたとうかがえる(『大正蔵』巻1、311頁中「諸比丘。須弥山王北面。天金所成。照鬱单越洲。東面天銀所成。照弗婆提洲。西面天頗梨所成。照瞿陀尼洲。南面天青琉璃所成。照閻浮提洲」)。なおこの箇所記述から、琉璃が青色の宝石であった(天青琉璃)ことがわかる。

9) 定方晟「七宝について」(『印度学仏教学研究』第24巻第1号、1975年、84-91頁) 管見の限りではこの問題、つまり仏典における七宝が実際にどの宝石に該当するかについて正面から取り扱った唯一の論考である。中でも琉璃と訳された *vaidrya* に関しては多くの頁を割いてラピスラズリ・サファイア・トルコ石等であった可能性を指摘されたが結論は出ていない。なお琉璃・頗梨共にガラスであった可能性も一応考慮されている(85-88頁)。

10) 定方前掲論文、87頁。

うに語られているかを見ていきたい。

しかしながら、仏教経典の内から頗梨について明解な説明を加えた記述を見出すことはなかなか困難である。前節で述べた通り、四宝及び七宝のひとつである頗梨は、名称自体は多くの仏典に見られるのであるが、その意味するところについては原典では自明であるため特に解説する必要がないからである。これは頗梨に限ったことではなく、琉璃やその他の宝石名も同様である。ただし、頗梨と琉璃以外の宝石は漢訳仏典においてもほぼ中国の言葉を用いた翻訳、つまり意識がなされており意味を取るにはあまり支障がなく、*vaidrya*の音訳とされる琉璃に関しては後述するようになかなか以前から中国に知られていたと考えられるので、翻訳に用いてもそれ程意味についての問題はなかったと思われる。

こういった理由により、頗梨が実際どのような宝石であったかを漢訳仏典から知る術はほとんどないが、ごく断片的な情報ならば皆無ではない。例えば『起世経』卷十、最勝品第十二には次のような記述がある。

諸の比丘よ。然らば彼の日天は二種の物を以て其宮殿を成す。正方なること宅の如し。遙かに看れば円に似たり。諸の比丘よ。何等を二と為すや、所謂金及び頗梨なり。此れ日宮殿なり。(中略) 一面一分、天頗梨成る。浄潔の光明、善く磨し善く瑩たり。無垢にして無穢なり<sup>11)</sup>。

日天の宮殿は二種の物、つまり金と頗梨より造られている。その一面は天頗梨でできている。それは清浄な光明を放ち、よく磨かれてつやがあり、汚れも穢れもない、という。これだけでは頗梨の特質ははっきりとは判らないが、無色透明の水晶と仮定しても矛盾を生じない描写であるともいえる。

次に、論書を見てみよう。釈迦の教法である経典とは異なり、その教法についての研究や解釈、或いは経文の語義・思想などに注釈を加えた論書において経典に登場したような仕方で宝石が現れることはまずない。しかし、稀に比喩としての用例は存在しており、中には頗梨を用いた比喩もある。鳩摩羅什訳『百論』卷上に見えるのがそれである。

一に頗梨珠の如く色に随いて変ず。或いは青黄赤白等なり。是くの如く一に覚するも、塵に随いて別異あり。或いは苦を覚り或いは楽を覚る等、覚りて種種相あると雖も、實に是れ一覚たるか<sup>12)</sup>。

各人の塵に随って、同じく覚るといっても種々の相がある。これを「頗梨珠」が色に随って青・黄・赤・白等に変化するのに喩えたもの。「色に随いて変ず」とは、本来無色透明な頗梨珠が、映す色によって色合いを変えろという意味であろうか。

是くの如き等の種種に相を取るは、皆な虚妄と為す。頗梨珠の如し、前色に随いて変ず、自ら定色無し<sup>13)</sup>。

鳩摩羅什訳『大智度論』卷四三にも似たような一節があり、ここでは「頗梨珠」は前色——前にあるものの色の意か——によって色を変えるものであり、頗梨珠自身に特に定まった色はない、という。「定色無し」とあれば『智度論』のいう頗梨珠は、もともとは無色で透明なもの、と定義されていたと考え

11) 『大正蔵』卷1, 359頁上「諸比丘。然彼日天以二種物成其宮殿。正方如宅。遙看似円。諸比丘。何等為二。所謂金及頗梨。此日宮殿。(中略) 一面一分。天頗梨成。浄潔光明。善磨善瑩。無垢無穢」。

12) 『大正蔵』卷30, 171頁下「如一頗梨珠隨色而變。或青黄赤白等。如是一覺。隨塵別異。或覺苦或覺樂等覺雖種種相、實是一覺」。

13) 『大正蔵』卷25, 372頁中「如是等種種取相、皆為虚妄。如頗梨珠、隨前色變、自無定色」。

られる。『百論』での比喩とほぼ同じで、さらに具体的である。

本節で見てきたように、漢訳仏典の経文からのみ「頗梨」のイメージを明確に読み取ることは難しい。『百論』『智度論』に用いられた比喩表現からは、頗梨とは「定色」無くして「色に随い」その色が変化する宝石、すなわち無色透明な水晶を連想させる。ただしここで留意しておきたいのは、現代で水晶に分類される宝石は無色透明に限らず様々な色を呈している、ということである。つまり頗梨＝水晶とした場合、『百論』の例でいえば同じ頗梨珠という物質であっても諸条件によって「青黄赤白等」の色を発現するものであり、『智度論』における「定色無し」とは透明ではなくて決まった色がない、との解釈も成り立つわけである。これは定方氏の「頗梨＝水精＝無色透明の水晶」という見解とは少しく相違し、またここに提示した史料だけではどちらが正しいとも判別できないが可能性の問題として触れておき、後ほど検討したい。

結局のところ漢訳仏典の読者に *sphaṭika* の語義を理解させるためには、経文中にその解釈がほとんど存在しない以上、意識語であるところの「水精」を用いて翻訳することが最も効果的と思われるし、また実際に「水精」の語が使用された仏典も少なからず見受けられる。水精は中国で古くから知られた言葉であり、*sphaṭika* と水精が全く同一のものを指すならば仏典翻訳の際に利用されるのは当然といえる。しかし、経典全体から見れば *sphaṭika* を当て字の音訳語である頗梨の語をもって翻訳するケースの方が圧倒的に多いのは、中国人読者の理解を得るという観点からは聊か不可解に感じられる。そこで、次節では仏典漢訳の場においてそれぞれ同一原語からの翻訳語として用いられた「頗梨」及び「水精」両語の関係性について考えたい。

### 3 「水精」から「頗梨」へ

仏言えらく、比丘よ、須弥山王は四宝を以て城を作す。琉璃・水精・金・銀なり<sup>14)</sup>。

西晋の法立・法炬の共訳になる『大樓炭經』巻一、閻浮利品にはこのような記述がみられる。曰く須弥山王は「琉璃・水精・金・銀」の「四宝」より城が造られているという。これは「水精」という訳語が用いられた経典のひとつの例である。先に見てきたような「四宝＝金・銀・琉璃・頗梨」と比較すると、語順はともかく内容的には頗梨と水精が入れ替わっているのみである。とすれば頗梨と水精は同一原語 *sphaṭika* の異なる形の翻訳語と考えて差し支えないことになる。『大樓炭經』は『起世經』と同一系統の原典からの漢訳、いわゆる異訳経であり、細部にかなり違いはあるが構成や内容はほぼ同じである<sup>15)</sup>。『起世經』において四宝は金・銀・琉璃・頗梨で七宝は金・銀・琉璃・頗梨・真珠・車渠・瑪瑙であったことは既に述べており、『大樓炭經』における四宝が琉璃・水精・金・銀であることは今確認した通りである。七宝の方はどのように定義されているかという点、同じく閻浮利品に、

次に山有り、名は冬王。甚高なること億を過ぐ。山上は高さ四千里、上に水有り、名は阿那達。広・

14) 『大正藏』巻1, 277頁下「仏言。比丘。須弥山王以四宝作城。琉璃水精金銀」。

15) 『起世經』の異訳経には他にも後秦の仏陀耶舎・竺仏念の共訳『長阿含經』に含まれる「世記經」や隋の達摩笈多訳『起世因本經』等が現存する。『起世經』関連の典籍については石川海浄「長阿含世記經の成立に就て」(『日本仏教学協会年報』第8号, 1936年, 156-199頁)参照。

長は二千里、其の底沙は皆な金なり。其の水は涼冷、軟美にして且つ清し。七宝の金・銀・琉璃・水精・赤真珠・車渠・馬瑙を以て塹壘を作す<sup>16)</sup>。

とあって「金・銀・琉璃・水精・赤真珠・車渠・馬瑙」と訳されている。これを『起世経』の七宝と比べるとやはり頗梨と水精だけが明らかに異なっていることがわかる。

別の一例をあげよう。鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』信解品の经文「其父先来求子不得。中止一城。其家大富財宝無量。金銀琉璃珊瑚虎珀頗梨珠等」云々を先に紹介したが、この異訳経である西晋の竺法護訳『正法華経』卷三、信樂品の該当する箇所では、

父、異城に詣る。無央数の金銀珍宝、水精・琉璃・車渠・馬瑙・珊瑚・虎魄を獲て、帑藏に盈満す。侍使・僮僕・象馬・車乗は称計すべからず<sup>17)</sup>。

となっている。『妙法蓮華経』が宝石の名として「金・銀・琉璃・珊瑚・虎珀・頗梨珠」をあげるのに対して『正法華経』では「金・銀・水精・琉璃・車渠・馬瑙・珊瑚・虎魄」となっており、頗梨珠が消えて水精・車渠・馬瑙が増えている。この場合も、頗梨と水精に関しては両者が入れ替わったものと考えて良いだろう。『正法華経』には他にも卷三、授声聞決品に

仏の滅度の後、各おの塔廟を起つ。高さ四万里、広・長は各おの二万里なり。皆な七宝より成る。金・銀・琉璃・水精・車渠・馬瑙・珊瑚・碧玉なり<sup>18)</sup>。

とあって、七宝を——ここでは八種類数えられるが——「金・銀・琉璃・水精・車渠・馬瑙・珊瑚・碧玉」とする等、經典全体を通じても頗梨の語は見当たらない<sup>19)</sup>。

このように異訳経の存在する經典間で比較してみると、やはり同一の原語を頗梨と翻訳した經典と、水精と翻訳した經典があったことがわかる。時には一經典の内に頗梨・水精が共に見られる場合もあるが、それぞれ別の箇所に用いられることはあっても、例えば七宝の中に二つが同時に含まれるなど明らかに頗梨と水精が別物のように扱われることはない。東晋の仏陀跋陀羅訳『仏説観仏三昧海経』では一方で「金水之中、有一妙水如水精色<sup>20)</sup>」といい、他方では「是世界中、皆有琉璃頗梨億宝以為仏窟<sup>21)</sup>」という類のものである。

漢訳仏典においては、翻訳者や訳出の年代により使用される訳語が変化するという現象が往々にして見られる。本稿で問題にしている頗梨と水精も、そのように個々の仏典が漢訳されるにあたって諸条件

16) 『大正蔵』卷1, 278頁下「次有山名冬王。甚高過億。山上高四千里，上有水名阿那達。広長二千里。其底沙皆金。其水涼冷。軟美且清。以七宝金銀琉璃水精赤真珠車渠馬瑙作塹壘」。

17) 『大正蔵』卷9, 80頁中「父詣異城。獲無央数金銀珍宝水精琉璃車渠馬瑙珊瑚虎魄。帑藏盈満。侍使僮僕象馬車乗不可称計」。

18) 『大正蔵』卷9, 87頁下「仏滅度後各起塔廟。高四万里，広長各二万里。皆七宝成。金銀琉璃水精車渠馬瑙珊瑚碧玉」。

19) なお『妙法蓮華経』卷三、授記品の相当部分においては「諸仏滅後，各起塔廟。高千由旬，縦広正等五百由旬。皆以金銀琉璃車渠馬瑙真珠玫瑰七宝合成」（『大正蔵』卷9, 21頁中）となっており、七宝中に頗梨も水精も含まれていない。これは他の經典類を参照しても比較的稀なケースである。ただし「頗梨」という語彙自体は經文中にも何度か使用され（そのひとつは既に本文中であげた通り）、逆に「水精」という語は一度も使われていない。法華経類の相互関係・成立問題については坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上（岩波文庫，1962年）の「解題」等参照。

20) 『大正蔵』卷15, 665頁中。

21) 『大正蔵』卷15, 665頁下。

によって変化する訳語のひとつであるとするならば、どのような条件が影響して sphaṭika の訳語が頗梨あるいは水精として経文中に現れてくるのか、という問題についても考えておく必要があるだろう。

まずは訳出年代による訳語の別を想定してみる。今までにあげてきた經典の例を整理すると、西晋の法立・法炬の共訳『大樓炭經』では「水精」を、隋の闍那崛多等の訳出である『起世經』は「頗梨」が使用されていた。また西晋の竺法護訳『正法華經』は「水精」を、後秦の鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』中では「頗梨」という語を用いて訳がなされている。鳩摩羅什は『仏説阿彌陀經』においても「頗梨」と訳しているし、頗梨・水精両語がみえる『仏説觀仏三昧海經』は東晋の仏陀跋陀羅の訳とされるが、彼は鳩摩羅什とほぼ同時期の人物である。

このように見てくると、西晋代の訳出經典では「水精」を、後秦の鳩摩羅什ないしそれ以降では「頗梨」という訳語が使われているかのような印象を受ける。一般的な訳経史の時代区分によれば、安世高に代表される後漢末の最初期の仏典漢訳から三国・西晋代を経て後秦の鳩摩羅什に至る直前までを古訳時代、鳩摩羅什以後を旧訳時代、唐の玄奘の翻訳以降を新訳時代と称するが、この古訳と旧訳の境界がそのまま水精と頗梨の使用時期の境界ともなり得るのだろうか。

結論から言えば、この仮説はある程度の正確さを持っていると考えられる。なぜならば『大正新修大藏經』に収録された漢訳仏典の中で訳出年代が西晋以前とされているものでは、少数の例外を除いて「頗梨」の語が見られず該当箇所が全て「水精」と訳されているからである。例えば後漢の安世高は『阿那邠邸化七子經』で水精を用い<sup>22)</sup>、同じく後漢の支婁迦讖訳『道行般若經』『遺日摩尼宝經』『無量清淨平等覺經』『般舟三昧經』等にも水精の語がみえている。三国呉の時期の著名な在家翻訳者支謙の訳出經典『須摩提女經』『大明度經』『菩薩本業經』『阿彌陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』『慧印三昧經』等、西晋の竺法護も『正法華經』ばかりでなく『徳光太子經』『普曜經』『光讚經』『漸備一切智徳經』その他の經典の翻訳に際しても同様に「水精」を使用している。先に「頗梨」の語が見られる少数の例外としたのは3例であるが、どれも『大正新修大藏經』において附された訳者・訳出年代が疑われており実際の成立年代は東晋以降ではないかと考えられている經典ばかりである<sup>23)</sup>。よってこの3例をデータ収

22) 『大正藏』巻2, 862頁上「彼有伊羅波多羅藏。無數百千金銀珍寶車渠馬瑙真珠琥珀水精琉璃及諸衆妙宝」。

23) まず「失訳人名在後漢録」とされている『大方便仏報恩經』には「爾時諸毒龍。即開路令太子得過。得至城門下。見二玉女紡頗梨縷」の一節がある(『大正藏』巻3, 144頁下)。しかし経文中に、南朝宋代の訳である『菩薩善戒經』等の經典から転用したとおぼしき字句がみられること等の理由から実際の成立は南北朝期以降と考えられている。内藤竜雄「大方便仏報恩經について」(『印度学仏教学研究』第3巻2号, 1955年, 313-315頁)、船山徹「漢訳」と「中国撰述」の間 — 漢文仏典に特有な形態をめぐって — (『仏教史学研究』第45巻第1号, 2002年, 1-28頁) 参照。

第二に魏の康僧鎧訳とされる『仏説無量寿經』には「又其国土。七宝諸樹周満世界。金樹。銀樹。琉璃樹。頗梨樹。珊瑚樹。瑪瑙樹。車磝樹」(『大正藏』巻12, 270頁下)とあるがこれも訳出年代はもっと下とされている。中村元・早鳥鏡正・紀野一義『浄土三部經』(岩波文庫, 1990年)「解題」参照。

第三に呉の支謙訳とされる『菩薩本縁經』がある。「所施之物。謂金銀琉璃頗梨真珠車磝馬瑙珊瑚璧玉種種器物。及諸衣服床臥敷具車乘舍宅田地穀米奴婢僕使象馬牛羊」(『大正藏』巻3, 57頁下-58頁上) この經典も支謙訳であることを疑われている。干潟龍祥『改訂増補本生經類の思想史的研究』(山喜房仏書林, 1978年) 参照。

訳出年代が真実ならば本来使用されてないはずの「頗梨」の訳語が経文中に見えるという事実も、これらの經典の

集の対象外とすれば、西晋以前に漢訳された經典で「頗梨」を用いたものは存在しないということになる。

それでは東晋以降ではどうであろうか。同じく『大正新修大蔵経』収録の經典でいえば、東晋孝武帝の太元年間（376-397）に訳経を行った竺曇無蘭と僧伽提婆は翻訳に水精を使用している<sup>24)</sup>。412（後秦弘始14）-413（同15）年に仏陀耶舎・竺仏念によって共訳された『長阿含経』には『大樓炭経』『起世経』の異訳経にあたる「世記経」が含まれているが<sup>25)</sup>、「世記経」のみならず『長阿含経』全体を通じて水精の語が使われている<sup>26)</sup>。竺仏念の他の翻訳經典でも水精が見られる<sup>27)</sup>。401（後秦弘始3）年に長安へ入ってより十数年間に亘って訳経を行った鳩摩羅什が多くの經典で翻訳に頗梨を用いたことは既に見てきた通りであるが、鳩摩羅什訳の經典であっても『成実論』卷五、聞声品「又汝言眼光雖遠去，不能至百千万由旬。雖能徹見水精等障，壁等障則不見<sup>28)</sup>」のように水精が使われたケースもある<sup>29)</sup>。北涼の曇無讖訳經典にも『金光明経』では頗梨が<sup>30)</sup>、『文陀竭王経』では水精の語が見られるなど<sup>31)</sup>、東晋五胡の時代の訳経は水精から頗梨への一種の移行期であったのかとも思われる。これ以降、南北朝期に入ると頗梨の使用が主となる。南朝宋の智嚴・曇良耶舎、梁の月婆首那、陳の真諦、北魏の菩提流支、北齊の那連提耶舎などの訳出經典に見られるのは頗梨の語のみである。

そこで当初の疑問、すなわち鳩摩羅什の訳経を契機とする旧訳時代の開始時期と訳語「頗梨」の出現時期が重なるのかという問題に戻ると、これは大体その通りだと考えて差し支えないことになる。ただし、必ずしも鳩摩羅什が「頗梨」を最初に使い始めたかと断定できるわけではないし、また「頗梨」と「水精」の用例は、一方が他方に完全に取って代るといった類のものでもない。確かに南北朝以後は頗梨の使用例が圧倒的となるが、唐代、玄奘の翻訳經典にも頗梨の使用に加えて水精の語も散見されるなど<sup>32)</sup>、バランスを欠くとはいえ両者は併存の状態にあったと考えられるからである。少なくとも sphatika は古訳時代には「水精」と翻訳されており、鳩摩羅什の頃つまり旧訳の時代に至って「頗梨」という訳

---

成立年代が実際には後代に下ることの傍証にはなるだろう。

24) 例えば、竺曇無蘭訳『玉耶経』「屋宅牆壁，皆如琉璃水精之色内外相見」（『大正蔵』卷2，866頁上）、及び僧伽提婆訳『増一阿含経』卷一三、地主品「於四衢道路起四廟寺，各用七宝金銀琉璃水精懸繪繡蓋」（『大正蔵』卷2，610頁下）等。

25) 前掲注15) 参照。

26) 「世記経」三災品での一例をあげると、「有乱風起吹此水沫造須弥山。高六十萬八千由旬，縦広八万四千由旬。四宝所成金銀水精琉璃」（『大正蔵』卷1，139頁上）。

27) 例えば『出曜経』卷一二、信品「時彼長者饒財多宝象馬七珍不可称計。金銀珍宝車渠馬瑙珊瑚琥珀水精琉璃」（『大正蔵』卷4，672頁下）。

28) 『大正蔵』卷32，269頁下。

29) 他に鳩摩羅什訳『海八徳経』にも「黄金白銀。琉璃水精。珊瑚龍玃。明月神珠」（『大正蔵』卷1，819頁上）の句が見えるが、吉元信行氏によればこの經典は最初期の訳経者、後漢の竺法蘭の訳出と思われるという（『大蔵経全解説大事典』雄山閣出版，1998年，12頁「仏説海八徳経」）。

30) 『大正蔵』卷16，337頁下「如日初出。頗梨白銀。校飾光網」。

31) 『大正蔵』卷1，824頁下「適坐左右顧視天上有玉女侍使。皆以七宝金銀琉璃水精珊瑚虎魄車渠。以為宮殿」（卷一、懺悔品）。

32) 例えば『説無垢称経』卷二声聞品の「勿以無価吠琉璃宝同諸危脆賤水精珠」（『大正蔵』卷14，562頁下）。

語が使用されるようになったという事実を確認しておきたい。

#### 4 「頗梨」と「水精」の示すもの

さて、頗梨と水精の関係性について、もうひとつ考えておくべきこと、この両語の意味の類似性と相違点の存在という問題がある。sphaṭikaという言葉に対して従来、意識を行って水精と翻訳するのが定着していたとするならば、後々の訳経においてこれを採用せずに頗梨と改め音訳語として訳す必要がどこにあったのか、という疑問が残る。先にも述べたが、漢訳仏典の読者の便を考えれば水精のままにしておいた方が理解を得易いはずである。ところがそうならなかったのは、sphaṭikaの訳語に「水精」を充てるのが本当は意味的に相応しくなく、結局既存の語彙に置き換えることが不可能と判断されたためではないだろうか。

中国において水精は古くから知られた言葉であり、「水の精」、そこから転じて無色透明の水晶を指すようになったと思われる。後漢の王充の『論衡』に、

山頂の溪は、江湖に通ぜず。然れども魚有るは、水精の自ら之と為るなり<sup>33)</sup>。

とあって江湖と連絡が絶たれた山頂の溪にも魚がいるのは「水精」の化したもの、というのはすなわち前者、水の精を意味している。他方、魏の魚豢撰『魏略』西戎伝に、大秦国について「以水精作宮及器物」といいその産物を列挙する中に金や銀、銅を筆頭とする多くの鉱石・貴石類の中に混じって水精の名もあげているのは<sup>34)</sup>、宝石の名称としての水精の用例である。

この宝石としての水精について、李自珍の『本草綱目』では次のように述べている。

瑩澈，晶光にして，水の精英の如し，会意なり。

水精も亦た玻黎の属なり，黒・白二色有り。倭国の水精多きこと第一なり，南の水精は白，北の水精は黒，信州武昌の水精のみ独り性堅くして脆刀もて刮るも色激動ぜざること泉の如し。清明にして瑩，水中に置き，瑕無くして珠の見えざる者佳し。古語に水の化すと云うは，謬言なり<sup>35)</sup>。

水精とは、明らかに透き通って光かがやく、「水の精英」である。また、玻黎の属とは該書での水精の直前の項目が「玻黎」であり、「其瑩如水，其堅如玉，故名水玉与水精同名<sup>36)</sup>」とあるのを受けたもの。倭国に多く産し、南方の水精は白く北方の水精は黒い。信州武昌の水精が最も硬く削れども透明度が変わらない。清らかに透き通っており、水中に置いた時に瑕が無く珠が見えなくなってしまうものが良い

33) 『論衡』 卷一六，講瑞篇「山頂之溪，不通江湖。然而有魚，水精自為之也」。

34) 『魏略』 西戎伝，大秦国条（『魏書』 卷三〇東夷伝所載）「大秦多金・銀・銅・鐵・鉛・錫・神龜・白馬・朱鬣・駭雞犀・玳瑁・玄熊・赤螭・辟毒鼠・大貝・車渠・瑪瑙・南金・翠爵・羽翮・象牙・符采玉・明月珠・夜光珠・真白珠・虎珀・珊瑚・赤白黒緑黄青紺縹紅紫十種流離・瑇瑁・琅玕・水精・玫瑰・雄黄・雌黄・碧・五色玉（後略）」前節で見た、仏教経典における七宝に名をあげられているものには下線を附した。流離は琉璃のこと、後述。これによれば「頗梨」を除く他の七宝の名称は早くから中国に知られていたものであったことがわかる。

35) 『本草綱目』 卷八，金石部，水精条「瑩澈晶光。如水之精英。会意也（中略）水精亦頗黎之属，有黑白二色。倭国多水精第一，南水精白，北水精黒，信州武昌水精独性堅而脆刀刮不動，色澈如泉。清明而瑩置水中，無瑕不見珠者佳。古語云水化，謬言也」。

36) 『本草綱目』 卷八，金石部，頗黎条，ここでは基本的に玻黎を水精と同一物、しかもガラスでなく水晶として扱っている。

—『本草綱目』自体は明代の成立であるが、その記述は中国の伝統的な水精觀を概ね踏襲しているを見てよいだろう。水が凝り固まってできたもの、という古い伝承からしても、中国における水精とは無色透明であることがその最大の特徴とされてきたに違いない。

このような「水精」が、仏典漢訳の際に *sphatika* の訳語として用いられたわけであるが、やがて「頗梨」という音訳語が出て漸次これに代わることとなった。その理由については、前節で述べたように、翻訳仏典の経文を見る限りははっきりしない。しかし唐代以後中国で著された仏教文献の中には、両者を明確に区別する記述が見られ始める。これは『一切経音義』に代表される、各々の漢訳仏典に使用された音訳語や難解な語彙の意味を解説した一連の辞典的著作物において *sphatika* の音訳語である「頗梨」が取り上げられたことによる。

例えば唐の慧琳撰『一切経音義』には、「頗梨」の注釈が数か所にわたって行われているが、以下がその最も詳細な解説を附した部分である。

梵語の宝名なり、正しき梵音は颯破置迦と云う。古訳に是を水精と云う、此の説は非なり。水精に類すと雖も、乃ち紫・白・紅・碧の四色有り。瑩淨に差別あり、通明なること、宝中の最上なり、紅・碧最も珍し、紫・白は其れ次す。好光、明砂の如く淨らかにして瑕点無し、是れ千年にして氷化すと云うは、作者の謬説なり<sup>37)</sup>。

ここでは最初に、古訳に用いられた水精という翻訳が誤りであることを明解に指摘している。水精の類であることは別の箇所にも「似水精又非水精、然亦其類<sup>38)</sup>」と認識されているが、紫・白・紅・碧の四色があって紅・碧色を貴重とし、紫・白色をその下とするのが水精との決定的な相違点である。通明、好光など透明感を強調するのは水精と同じく、千年の時を経て氷が凝り固まったものとする言説の否定は『大智度論』の「譬如過千歳氷、化為玻璃珠<sup>39)</sup>」を踏まえたもの。なお慧琳の『一切経音義』には慧琳以前に著された音義類も採録されており、『大般涅槃經』部分に関しては雲公のものを再録している。この雲公も頗梨について「正しくは頗胝迦と云う、此れ水玉を云い、其の状少しく北方の水精に似たり、然るに赤有り、白有るなり。大論に千年を過ぎたる氷化して頗梨珠と為ると云うは、未だ虚実詳らかならざるなり<sup>40)</sup>」といい、慧琳の解釈と大差はない。

*sphatika* の訳語として用いられた水精には、原語に存在する有色透明の宝石という概念が含まれておらず、意味的には若干の齟齬があった。そこで鳩摩羅什なりが正確を期するために音訳語の頗梨をもって翻訳を行った、というのが「水精」から「頗梨」への変化の理由であったと考えられる<sup>41)</sup>。山口久和

37) 慧琳撰『一切経音義』卷四（『大正蔵』卷54, 330頁中）「梵語宝名也、正梵音云颯破置迦、古訳云是水精、此説非也。雖類水精、乃有紫・白・紅・碧四色、差別瑩淨、通明、宝中最上、紅・碧最珍、紫・白其次、如好光明砂淨無瑕点、云是千年氷化、作者謬説也」なおこれは正確には頗胝迦の項である。

38) 『一切経音義』卷七二（『大正蔵』卷54, 773頁下）。

39) 『大智度論』卷二（『大正蔵』卷25, 134頁上）定方氏によれば西洋でも水晶はアルプスの氷の化石とする説があったという（定方氏前掲論文, 87頁）。

40) 『一切経音義』卷二一（『大正蔵』卷54, 436頁下）「正云頗胝迦、此云水玉、其状少似北方水精、然有赤、有白者也、大論云過千年氷化為頗梨珠、未詳虚実也」。

41) となれば本章2節であげた『智度論』『百論』の頗梨珠の比喩では「隨色而変」や「自無定色」を無色透明の証ではなく同じ物質でもそれぞれ別の色を発現すると考えるべきか。前注12)・注13) 参照。

氏によれば、鳩摩羅什は不自然で仏教理解に資する所の無い意識語は音訳語に改め直して読者に感覚的に訴え、印度的情趣をよく保存した所にその訳経の特色があるとされている<sup>42)</sup>。あるいは四宝として並び称され、既に音訳語として定着していた「琉璃」と字面を合わせたのかもしれない。ともかくこのような過程を経て新たに成立した音訳語「頗梨」が、中国の一般社会にも受容され、ガラスの名称として普及していったのである。

## 二 中国のガラスと「琉璃」「頗梨」

中国におけるガラスの歴史<sup>43)</sup>は古く、すでに西周の前10世紀から西方産のものが流入しており、春秋・戦国期にかけては中国で独自に生産されていた。当時の中国産のガラス珠は玉の模造品として使用されており、不透明な青・緑・青緑色をしていたという。漢代に入ると、副葬品としての璧・環・剣具などが、ある程度の透明感をもったガラスで製作されるようになったが、後漢末から隋にかけて中国のガラス生産は一時途絶えることになる。

張維用氏によれば<sup>44)</sup>、この時期の中国製ガラス製品はあくまで瑪瑙や松石などと共に玉の代用品であり、従って琉璃など特定の名称で呼ばれることはなかっただろう、と言われる。すなわち琉璃の名で呼ばれたのは西方産の輸入ガラスを主としてその対象としたようである。本章では中国におけるガラスの名称としての「琉璃」と「頗梨」に注目し、前章で見た仏典におけるそれらの用例と比較、考察する。

### 1 ガラスの製作と「琉璃」

中国でガラスについて言及した史料が散見されるのは、漢代以降のことである。前章で述べたように、この時期にはまだ「頗梨」という言葉はなく、別に「琉璃」の語を用いていた。琉璃は現在、ガラスの古名であると考えられており、その最も初期には「流離」とも書かれていた<sup>45)</sup>。『漢書』地理志にいう、  
夫甘都盧国より船行すること二月余ばかり、黄支国有り（中略）訳長有りて、黄門に属す、募に应ずる者と俱に海に入りて明珠・璧流離・奇石異物を市い、黄金雜繪を齎して往く<sup>46)</sup>。

42) 山口久和「支謙訳維摩経から羅什訳維摩経へ — 訳経史研究の支那学的アプローチ —」（『印度学仏教学研究』第26巻第1号、1977年、146-147頁）。

43) 考古学的見地からの中国ガラス研究は現在まで非常に多くの発見がなされ、その研究成果が陸続と発表されている。ただし、こういった研究において本稿で取り上げるガラスの名称そのものが考察の対象となることはほとんどないため、ここでは主な出版物の名をあげるに止める。中国での最新の成果については干福熹主編『絲綢之路上的古代玻璃研究』（复旦大学出版社、2007年）、関善明『中國古代玻璃』（香港中文大学出版社、2001年）等を参照のこと。日本における代表的な著作として谷一尚『ガラスの考古学』（同成社、1999年）、東京国立博物館編『東洋古代ガラス：東西交渉史の視点から』（東京国立博物館、1980年）、由水常雄・棚橋淳二『東洋のガラス：中国・朝鮮・日本』（三彩社、1977年）、由水常雄『ガラスの道：形と技術の交渉史』（徳間書店、1973年）等があげられる。

44) 張維用『琉璃名実辨』（『故宫博物院院刊』第2号、1986年、64-69・96頁）。

45) これについて『本草綱目』で李自珍は「言其流光陸離也」（巻八、金石部、琉璃）としている。

46) 『漢書』巻二八下・地理志第八下「自夫甘都盧国船行可二月余、有黄支国（中略）有訳長、属黄門、与应募者俱入海市明珠・璧流離・奇石異物、齎黄金雜繪而往」。

や、先に触れた『魏略』西戎伝中に大秦国の産物のひとつとしてあげられている、「赤・白・黒・緑・黄・青・紺・縹・紅・紫十種流離<sup>47)</sup>」などがそれである。

また、琉璃の語も同様に早い時期から見られる。呉の萬震作『南州異物志』には、

琉璃の本質は是れ石なり。器を作らんと欲せば、自然灰を以て之を治す。自然灰、状は黄灰の如し、南海の浜に生ず<sup>48)</sup>。

との記述がある。琉璃というものの本質は石であること、自然灰とは石灰のことであり、内田吟風氏がこの記事をもって「琉璃器すなわちガラス製造法を記した初見として重視さるべき中国史料か」とされた<sup>49)</sup>ように、明らかに琉璃を人工物、ガラスとして扱ったものである。後漢末より一時途絶えた中国ガラスの製作は、6世紀の末に隋の何稠によって復活させられたのであるが、『隋書』何稠伝にも、

時に中国、久しく瑠璃の作を断ちて、匠人敢えて厝意する無し、稠、緑瓷を以て之を為るに、真なると異ならず<sup>50)</sup>。

とあって何稠が復興したのを「瑠璃の作」であるとしている。この他にも『後漢書』に哀牢夷国の産物として金や銀、水精と共に瑠璃があげられる<sup>51)</sup>など、主に西方諸国の産物を紹介する中に琉璃が見える場合が多いが、これらが全てガラス製品の意味で用いられていると断定することはできない。というのも、既に見てきたように、これらと同時期に翻訳された漢訳仏典中にも「琉璃」が登場し、しかもそこでは琉璃は四宝ないし七宝に常に含まれる重要な宝石とされてきたからである。

仏教語としては *vaidrya* の音訳語とされる琉璃には他にも「毘琉璃」「吠瑠璃」などの表記があり、別の訳、意識語としては「遠山宝」があったことが宋の法雲編『翻訳名義集』に記されている。

山に従りて名と為す。乃ち遠山宝なり。遠山は即ち須弥山なり。此の宝は青色なり。一切の宝は皆、壊すべからず。亦、煙焰の能く鎔鑄する所に非ず。唯だ鬼神の通力有る者のみ能く破壊す<sup>52)</sup>。

しかし、*sphatika* の意識語である水精と違って、この「遠山宝」は実際の経文にはほとんど使用されなかった。恐らく仏典が漢訳される以前から「琉璃」という語が中国で用いられていたため、これをそのまま流用したのであろう。琉璃の最初の表記が流離であったことは先に述べたが、現存漢訳仏典中において *vaidrya* の訳が「流離」と訳された例はなく<sup>53)</sup>、始めから琉璃の字を当てられていたことは注目される。流離が琉璃と書かれるようになった後に、漢訳仏典に取り入れられたと考えられるからである。

ただし、元来中国で通用していた「琉璃」がガラス製品を指したものであったとすれば、仏典にいう

47) 前注34) 参照。

48) 『太平御覧』卷八〇八所引「琉璃本質是石。欲作器，以自然灰治之。自然灰状如黄灰，生南海浜」。

49) 内田吟風「『異物志』考 — その成立と遺文 —」『森鹿三博士頌寿記念論文集』（同朋舎出版，1977年，275-296頁）296頁参照。

50) 『隋書』卷六八，何稠伝「時中国久断瑠璃之作，匠人無敢厝意，稠以緑瓷為之，与真不異」。

51) 『後漢書』卷八六，西南夷列伝，哀牢夷条「哀牢夷（中略）出銅・鉄・鉛・錫・金・銀・光珠・虎魄・水精・瑠璃・軻蟲・蚌珠・孔雀・翡翠・犀・象・猩猩・貂獸」。

52) 『翻訳名義集』卷三，七宝篇（『大正藏』54，1105頁中）「従山為名。乃遠山宝也。遠山即須弥山也。此宝青色。一切宝皆不可壊。亦非煙焰所能鎔鑄。唯鬼神有通力者能破壊」。

53) 例えば後漢の安世高なども「琉璃」と訳している。注22) 参照。

vaidryaと意味の食い違いが生じるのは当然のことであった。

琉璃は、青色の宝なり。仮有り真有り、真なる者は得難く、外国に出づ。仮なる者は即ち此の国にて石を鍊りて之を作り、染めて五色と為すなり<sup>54)</sup>。

『一切経音義』ではこのように「琉璃」を解説している。ここで言う「仮者」は明らかに中国製のガラスを指している。それに対する「真者」は、青色の宝、四宝の一であり須弥山の南面を形造るという天然の宝石である。「真者」と「仮者」を対比させて強調しているのは、『一切経音義』が書かれた時期、建中年間～元和二（780-807）年においても一般には琉璃がガラスの意味で用いられており、宝石を意味する仏典の琉璃との混同を避けるためであったと考えられる。

此れ蓋し自然の物なり、采沢光潤なること、衆玉に踰え、其の色恒ならず。今俗に用う所は、皆石汁を銷治し、加うるに衆薬を以ってし、灌ぎて之を為る、尤も虚脆にして貞しからず、実に真物に非ず<sup>55)</sup>。

顔師古は『漢書』西域伝の罽賓国の条に注して先に紹介した『魏略』西戎伝の大秦国の産物「赤白黒緑黄青紺縹紅紫十種流離」を引用した後、さらに上のように述べている。これに関して吉田光邦氏は、「師古は大秦国の十色のガラスについて説きつつそれを自然物とみなす点で誤っている<sup>56)</sup>」と述べ、また張維用氏も同様に顔師古の誤りを指摘している<sup>57)</sup>。確かに、当時一般的に琉璃がガラスの意味で通用していたらしいことを考えると、顔師古が「蓋し自然の物なり」「今俗に用う所は、…実に真物に非ず」というのは少し奇妙な感じがする。例えば何稠の「瑠璃の作」が「真なると異ならず」という『隋書』の記事における「真」が（本場の）西方産のガラス製品を指すことは間違いない。その底辺には張氏の言われるように従来の中国製ガラス製品が玉の代用品でかつ品質面でも西方産には到底及ばず、琉璃とは呼ばれなかった—呼ぶに値しなかった—という事実があり、だからこそ何稠の琉璃が「真」なる西方産にも劣らないという評価を受けたのであろう。

しかし、顔師古のいう「真物」は何稠伝のそれとは意味合いが異なる。彼は琉璃の「真：仮」を「西方産ガラス：中国産ガラス」とは捉えず、「天然の宝石：人工物のガラス」と考えたわけである。これは現実的な感覚ではなかったかもしれないが、仏典における琉璃の定義を念頭に置いたものとするれば、顔師古の主張は一概に誤りともいえないのではないだろうか。実際、vaidryaの内容として定方氏はラピスラズリ・サファイア・トルコ石等の天然の宝石を想定されており<sup>58)</sup>、経典の記述からも琉璃が天然の宝石であることは明らかである。とすれば琉璃がすなわちガラスのみを指したという状況、或いはそのようにのみあったと決めつける状況の方にこそ問題が存在するのかもしれない。

54) 『一切経音義』巻一八（『大正蔵』54, 418頁）「琉璃，青色宝也。有仮有真，真者難得，出外国。仮者即此国鍊石作之，染為五色也」。

55) 『漢書』巻九六上，西域伝，罽賓国条師古注「此蓋自然之物，采沢光潤，踰於衆玉，其色不恒。今俗所用，皆銷治石汁，加以衆薬，灌而為之，尤虚脆不貞，実非真物」。

56) 吉田光邦「中国古代のガラスと釉薬」『中国科学技術史論集』（日本放送出版協会，1972年，183-196頁）192頁参照

57) 張維用前掲論文，注44参照。張氏は顔師古が真なる玻璃を天然の宝石だとしたことがその後の「真假琉璃」（ガラスは仮の琉璃で，真の琉璃は天然物であるという主張を認めるか否か）論争の発端になったとする。

58) 前掲注9）参照。

## 2 「頗梨」の受容

ところで、既に慧琳撰『一切経音義』における「頗梨」及び「琉璃」の解釈について見てきたわけであるが、両者の記述を比較するとその強調する部分に明らかな相違があることがわかる。頗梨については、古訳に用いられた訳語である水精との性質的な違いの解説に終始するのに対し<sup>59)</sup>、琉璃についてはその指し示すものに外国に産出する青色の宝石と、別に石から造って色を着けた「仮者」があることを説明している<sup>60)</sup>。

そこで慧琳が『一切経音義』を撰した唐の建中年間～元和二（780-807）年には琉璃がガラスの名称として通用していたと考えられるのは先述した通りであるが、これを頗梨の場合と比べるとどうか。もし当時から頗梨という語にも現在のようにガラスの名称としての用法があったならば、「頗梨」の項目にも何らかの言及があってもおかしくはないのに、『一切経音義』中にはそれが見当たらない。となればこの時期にはまだ「頗梨」が一般には知られていなかったか、少なくともガラスを示す言葉としては用いられていなかったと考えられるのではないだろうか。

詩文や筆記小説を中心としてガラスを意味する玻璃・琉璃についての関連史料を収集した李素楨・田育誠両氏によれば、玻璃（頗梨）の語が明確に記載されていることを確認できるのは南北朝以降であるとされる<sup>61)</sup>。これは前章において述べた、漢訳仏典中への「頗梨」の登場よりも時期的に若干遅く、やはりこの語が漢訳仏典における訳語から一般へ普及したものであることをうかがわせる。

実際に仏教経典の外で用いられた「頗梨」について具体的に見てみると、例えば『北史』西域伝の波斯国の条に、

土地は平正にして、金・銀・鍮石・珊瑚・琥珀・車渠・馬腦を出だし、大真珠・頗梨・瑠璃・水精・瑟瑟・金剛・火齊・鑛鐵・銅・錫・朱沙・水銀・綾・錦・疊・毼・毼毼・毼毼・赤麀皮多し<sup>62)</sup>。

等とあり、『新唐書』西域伝の罽賓国の条にも、

罽賓、隋の漕国なり、葱嶺の南に居す。（中略）武徳二年、使を遣わして宝帯・金鎖・水精の醜・頗黎の状、酸棗の若きを貢す<sup>63)</sup>。

とみえる。唐高祖の武徳2（619）年には他にも、劫という国が宝帯・玻璃・水精の杯を献上したという記事がある<sup>64)</sup>。

これらの史料に共通しているのは、「水精」と「頗梨」の語が並行して見出されること、すなわちこ

59) 前注37)・注38)・注39) 参照。ちなみに先にあげた宋法雲編『翻譯名義集』には頗梨について「或云塞頗胝迦。此云水玉，即蒼玉也。或云水精，又云白珠」（『大正藏』卷54，1105頁下）というのみであり、他の『音義』系の典籍も同様である。

60) 前注54) 参照。

61) 李素楨・田育誠「中国古代詩文中の玻璃史料」（『故宮博物院院刊』第2号，1986年，70-73頁），70頁参照。ただしこの論考において漢訳仏典及び仏教関連の典籍は全くの対象外である。

62) 『北史』卷九七，西域伝，波斯国条「土地平正，出金・銀・鍮石・珊瑚・琥珀・車渠・馬腦，多大真珠・頗梨・瑠璃・水精・瑟瑟・金剛・火齊・鑛鐵・銅・錫・朱沙・水銀・綾・錦・疊・毼・毼毼・毼毼・赤麀皮」。

63) 『新唐書』卷二二一上，西域上，罽賓国条「罽賓，隋漕国也，居葱嶺南（中略）武徳二年，遣使貢宝帯・金鎖・水精醜・頗黎状若酸棗」。

64) 『新唐書』卷二二一下，西域下，劫国条「劫者，居葱嶺中，（中略）武徳二年，遣使者献宝帯・玻璃・水精杯」。

の二つが本質的に別物として認識されていたことである。これは仏典において水精と頗梨が同一原語 *sphaṭika* の意識語であって決して同時には用いられなかったのとは全く異なる傾向であり、仏教外では最初から頗梨は水精とは違うものとして受容された事実を示している。

それでは、これらの「頗梨」は現在と同じくガラスを指していたのだろうか。中国ガラス史の研究においても史料中の「頗梨」はほぼガラスである、と考えられているようであるが、果たして一律にそうと断定することができるだろうか。単に史料の記述を見る限りでは「頗梨」がどのようなものかわからないのは漢訳仏典における頗梨と同様である<sup>65)</sup>。その漢訳仏典における頗梨は、『一切経音義』によれば水精と異なるとはいえ有色透明の宝石であり、人工物である可能性については言及されていない。もし登場時期の関係からみて「頗梨」が漢訳仏典から転用され流通した言葉であると想定すれば、他史料において「頗梨」が最初から仏典での用例の影響を受けずにガラスの意味で用いられていたかどうかは疑問である。慧琳の言うように有色の水晶を指して「頗梨」と呼んだ可能性も考慮すべきではないだろうか。

### おわりに

以上のように、本稿では、中国における音訳語「頗梨」「琉璃」の成立と流通、及びその過程において発生した意味の変容について分析を行った。これを時系列によってまとめると次のようになる。

まず中国において最初にガラス、特に西方からの輸入ガラス製品を示す言葉として流離・琉璃が用いられていた。仏教經典の翻訳が始まると、この琉璃を青色の宝石 *vaiḍṛya* の訳語に用い、透明の宝石 *sphaṭika* を「水精」と訳するようになった。しかし古訳時代、すなわち後秦の鳩摩羅什による訳経が行われた頃から *sphaṭika* の訳語は音訳語である「頗梨」が主として使われ始める。これは中国で水精が無色透明の水晶を表したのに対し、*sphaṭika* には有色のものも含まれていたため訳語が「頗梨」に代えられたのであろう。琉璃は仏典で宝石として用いられる一方、一般にはガラスと認識されていた状況が、少なくとも『一切経音義』が成立した唐の中期までは続いていたと考えられる。当時、「頗梨」も仏典から取り入れられ一般にも使用されたが、これが即ガラスの名称として用いられたかは定かではなく、最初はむしろ漢訳仏典における定義の影響を受けて有色透明の宝石と認識された可能性の方が高いのではないだろうか。

本稿では、「頗梨」が漢訳仏典における水晶 *sphaṭika* の訳語として成立したこと、よって一般に受容された当初からガラスを意味したとは考えにくいことを指摘した。それでは「頗梨」がいつ頃どのようにガラスの名称へと転化したのか、また、水精との別が明確になった後の漢訳仏典に「水精」「頗梨」がどのように見られるかについては、今後の課題として、引続き考察を進めていきたい。

65) 本稿第1章第2節参照。